
君がくれた花～薔～

稀唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がくれた花～薫～

【Zコード】

Z5626K

【作者名】

稀唯

【あらすじ】

高校生の央那は母親の再婚相手の弟である直雄が好きだった。最近、距離を感じる彼・・・しかし、運命は彼女に過酷な試練を与える。二人の未来は？

「央那！」

大声で呼ばれ、岩倉央那はびっくりして振り返った。四車線の大通りの向こうで背の高い男性が手を振った。眩しい笑顔で。

「直雄」

央那は笑顔で手を振り返した。

岩倉直雄は横断歩道を渡り央那の傍らに来て「学校帰りか？それにしては、ちょっと早いようだけど」と、腕時計を見た。現在の時刻は1時。

「今、テスト中で半日で終わりだから。それよりもお腹空いてるんだけど」央那は直雄の腕にしがみついた。直雄はあきらめ顔で央那を見下ろした。

「仕方ないな。俺も昼飯まだだから、どうか入る?」

「うん！直雄、大好き！」

「・・・調子いいな」

「そんな・・・私はいつでも直雄のこと大好きだよ」

「わかつてる」直雄は央那の頭をぽんっと軽くたたいた。

二人は腕を組み歩き出した。

岩倉直雄は央那の叔父だ。

叔父といつても血は繋がっていない義理の叔父である。直雄に初めて会ったのは央那が九歳で直雄が十七歳の時だった。央那の母、美櫻に新しいパパを紹介したいと言われて連れて行かれたレストランにその新しいパパとその弟の直雄がいた。

その日から寂しかった央那の世界は一気に輝きだした。

本当の父親の記憶が無い央那は新しいパパ竜輝ともすぐに打ち解けた。直雄とも。直雄は叔父というより兄のような存在でいつも央那を可愛がってくれた。

それは直雄が就職し、家を出た今でも続いている。

「ねえ、今度いつ家に帰つて来るの？お父さんとお母さんが直雄は一人で大丈夫なのか？」って心配してたよ」

イタリアンレストランに入り、席に着いた央那は探るよな顔で聞いた。直雄はそんな央那を面白がるような顔で見た

「大丈夫に決まってるだろ？今度の連休には帰るよ」

「そう？なら、いいけど」

「ほら、何食べるんだ？」直雄はメニューを央那に差し出した。

央那はメニューの影から直雄を盗み見た。

直雄は真剣な顔でメニューを見ている。通つた鼻筋、涼しげな切れ長の瞳。その瞳が央那に向けられる時は暖かな光を宿す。

央那の視線を感じたのか直雄がさつと視線をあげた。

「決まつたのか？」

「え？あ、まだ」央那は焦つてメニューをめくつた。

心臓がドキドキする。

頬が熱くなる。

そう・・・私は直雄に恋してる。

連休の初日。

気持ちの良い快晴だ。

央那は朝から忙しく部屋の掃除をしたり母親を手伝つて昼食の用意をしていた。

だつて今日は久し振りに直雄が来るから。

外では結構会つているけど家で会うのは久し振り。

「おつ。今日の昼は豪華だな」

義理の父、竜輝がキッチンに入ってきた。

「今日は直雄くんが来るから央那がはりきつてんのよ」

美櫻は央那をチラツと見てから竜輝に笑いかけた。

「そういえば直雄が来るんだつけ」竜輝はテーブルの上の唐揚げを

つまんだ。

「ちょっと、お父さん！つまみ食いはダメ！」央那は竜輝の腕を軽く叩いた。叩かれた竜輝は笑いながら央那の髪をくしゃつとした。

「あー！せつかく綺麗にセットしたのに！」

「直雄が来るからつてはりきり過ぎじゃないか？」この間も一緒に昼飯食つたんだろ？」

「それとこれとは別だもん」頬を膨らませて竜輝を睨んだ。

「仕方ないでしょ。央那は直雄くんが大好きなんだから。もう、一人とも邪魔だから出て行つて。もう、直雄くん来るんじゃない？」

美楓は二人に向かつて追い払つよう手を振つた。

「髪直して来なくちゃ！」央那は慌ててキッチンを出て行つた。

央那が出て行つた後、美楓は困つた様な顔で夫を見た。

「央那が直雄を大好きなのは出逢つた時からだろ？」竜輝は美楓の肩に手を置いた。

「そう、ずつとね」

その時玄関のインターホンが鳴つた。

「直雄が来たみたいだな」

竜輝が玄関に着くより早く央那が階段から駆け下りてきた。

「私が出る！」

央那は勢いよくドアを開いた。

ドアの外に直雄が優しい笑顔で立つていた。

「央那の足音も声も外まで響いてたぞ」

直雄は央那の頭を軽く小突いた。優しい仕草に声。央那も笑みを返した。

久々の四人の食卓は暖かい雰囲気でとても楽しかつた。

「ずつとこんな時間が続いて欲しい。お母さんとお父さんがいて、直雄もいる。

私の家族。

「直雄くん、最近仕事忙しいの？」美楓は食後のコーヒーと手作り

のシフォンケーキをテーブルに並べる。

「それなりに。土曜出勤もたまにあるし」

直雄は通信会社に勤めている。入社三年目で任される仕事も増えてきていた。

「なんだ・・・大変なんだね」

央那が顔をしかめると直雄はフツと笑って、その顔を覗き込んだ。「平気だよ。来週の土曜の買い物は絶対一緒にに行くから」

「うん！」元気よく返事をする。

「買い物？どこに行くんだ？」竜輝はコーヒーを飲みながら楽しそうに二人を見た。

「新宿！」

「そう、荷物持ちだよ」

「えっ！直雄も行きたいお店あるって言つてたじやん！」

「まあ、そうだけど」

そんなやり取りに四人で笑いあう。

心地よい時間。
幸せな時間だ。

央那は玄関で直雄を見送った。

「ねえ？」

「うん？」靴を履き終わった直雄が振り返った。

「本当に土曜日は忙しくないんだよね？」

戸惑いがちに尋ねる央那を直雄は笑顔で見た。こんな風に自分を気遣う央那が可愛い。直雄にとつて会社は央那の次だつた。「平気だよ。時間と待ち合わせ場所は後でメールして。な！」直雄は央那の頭をポンッとして玄関を出て行つた。

火曜日。

連休明けの学校は正直ダルイ。昼休み、央那は親友の川崎透子と外のベンチでランチしていた。透子とは高校一年で同じクラスになり、すぐに意気投合。今では誰よりも仲の良い友達だ。彼女には何でも話ができる、直雄に対する気持ちも透子にだけ打ち明けていた。

「へー！土曜日デートなんだ！良かつたね」透子は央那のお弁当箱からウインナーをつまんだ。

「デートなんかじゃないよ。ただのショッピングだよ」央那も透子のお弁当箱からアスパラのベーコン巻きを取った。

「そう？デートにしか思えないけど」

「少なくとも直雄はデートなんて思っていないよ。単なる姪っ子の買物に付き合っただけって思つてるよ。きつとー」央那はきつとを強調して言つた。

「うーん・・・そつかな？」透子は難しい顔でおにぎりを頬張る。その時、一人に影が落ちた。

見上げると同じクラスの相馬祥吾が立つていた。

「何の話？」祥吾はにっこりと微笑んだ。かなりのイケメンだ。笑顔になると可愛い。背も高いし、勉強もそこそこできる彼はクラスでも人気者だつた。

「何でもないよ」央那はかぶりをふつた。

「難しい顔して話してたくせに何でもない？怪しいな」祥吾は央那の隣の空いているスペースに腰を下ろした。央那と透子は揃つて怪訝な顔をした。

「何だよ。その顔。ちょっとくらい良いだろ？」

「別に悪くはないけど、何か用？」透子はおにぎりを頬張つた。央那は一人の顔を交互に見た。

「岩倉に用があるんだよ」

「私？」央那はびっくりして祥吾を見た。

「今度の土曜に映画観にいかない？岩食、観たいのあるつてさつき話してただろ？」

「盗み聞き？」透子にジロリと睨まれ祥吾は慌てて手を振つた。

「違う！ たまたま聞こえただけだ！」

「怪しいな」透子は尚も疑わしげな顔で祥吾を見た。祥吾は透子のことは無視し、央那に視線を戻した。「どう？ 岩倉。行ける？」少し緊張した面持ちで尋ねる。

央那は申し訳なさそうに「ごめん。土曜は用事ある」と答えた。「用事つて？」

「央那は大好きな人とデートなの」央那より早く透子がつっこりと答える。

「大好きな人？」祥吾は央那から視線を外さずにジッと見た。

央那は居心地の悪さを感じていた。せめて祥吾が一人きりの時に言つてくれれば良かつたのにと思つてしまつ。

「あの・・・ごめんね」

「・・・」祥吾は無言で央那を見つめていたがスッと立ち上がつた。

「わかった。でも俺は諦めないからな。・・・また誘う」

きつぱりとそう言うと祥吾は立ち去つた。

央那と透子は祥吾の姿が見えなくなるまで、その後姿を見ていた。「また、誘うつてよ」

透子は横目で央那を見た。央那は困つた表情のまま祥吾が消えていつた校舎の角を見ていた。

土曜日。

央那は朝早くから念入りに準備をした。何度も鏡で確認して決めた服。いつもより念入りのメイク。長い髪はふんわりとしたアップにした。そして最後は・・・去年の誕生日にもらつたイルカモチーフのムーンストーンのネックレス。高校生になつたからつて少し大人なプレゼント。直雄はいつも央那の欲しいモノをくれる。それは物質的なモノだけじゃなく、温かく央那を包み込む気持ちも。家族

としてだけど今はまだそれで良かつた。直雄が側にいてくれるなら。

待ち合わせ場所に着くと既に直雄が待っていた。央那はちょっと

大回りして直雄の背後から近寄った。声をかけようとした、その時。

「遅いぞ、央那」

央那が声をかける前に直雄が肩越しに振り返った。

「なんだ。気付いてたの？」央那はがっかりして直雄の腕に自分の腕をからめた。

「黙つてようかとも思つたけど」

「騙されたフリは苦手だもんね。解つてるよ」央那がにっこり微笑むと直雄も微笑んだ。

「さあ、行こう。ド「から行くんだ？」

「じつち！」

央那は直雄の腕を引っ張つた。

ショッピングが終わると六時近くになつていた。辺りはすっかり暗い。

二人は荷物が多くなつたので一度、直雄のマンションに行き車で送つてもらうことになつた。

央那は部屋に入るとキヨロキヨロと中を見回した。

「相変わらず雑然としてるよね」

「最近、仕事が忙しくて片付けるヒマがなかつたんだよ」

「嘘つき。いつもこんな感じのくせに。ねえ？私が片付けに来てあげようか？」

「お前は真面目に学校に行つてればいいんだよ」

直雄はテーブルの上に紅茶の入つたマグカップを置いた。央那はそのマグカップを持ち、また部屋の中を歩き回つた。

「座つて飲んで。行儀悪いぞ」

「はあーい。・・・お父さんみたい」央那はちょっと頬をふくらませたが大人しくソファに座つた。

お父さんみたいと言われ、直雄は眉を寄せた。

その時、玄関のチャイムが鳴った。一人は顔を見合せた。

「誰だ？」直雄は玄関に向つた。その後姿を見て央那は内心の緊張が顔に出ないよう引締めた。直雄に彼女がいる気配はなかつたが、本当にいるのかどうかなんて分からぬ。もし今、彼女が訪ねて来たりしたら「姪だ」なんて紹介されるのだろうか？などと考えていると玄関の方から直雄の少し焦つた声が聞こえてきた。

「え？ ちょっと困るよ、今日は。あつ待て・・・」

央那は全身を硬直させソファに座り、来訪者を待つた。

「おつ！」やつて来たのは男性だった。彼はソファに座つている央那を見て、ビックリして立ち止まつた。

「知成！」直雄は男性の肩を押しのけて央那の元へ行つた。「央那、悪い。会社の同僚なんだ」

「会社の？」央那は男性をまじまじと見た。背は直雄と同じくらい高く、直雄とは違つたシャープな印象を受ける整つた顔立ち。一人が並ぶとかなり絵になり、人目をひきそうだ。男性はニヤリとちょっと意地悪そうな笑みを浮かべた。

「藤宮知成です。君は直雄の彼女？・・・にしてはちょっと若すぎる感じだけど、いくつ？」

「えつ、私は・・・」

「姪だよ。名前は央那。もういいだろ？ 帰れよ」直雄は遮るように央那の前に立つた。

「何でそんなに隠そうとすんだよ？ 怪しいぞ」知成は直雄を押しのけた。央那は一人の行動に呆気にとられていた。かなり仲が良さそうだ。そしてふと気付いた。そういうえば、直雄の友達とかつてあまり知らない・・・と。

「央那ちゃん、可愛いね。大学生？」知成は少し頭を傾け、笑顔で央那に尋ねた。央那は答えようと口を開いたが直雄の方が先に答える「高校生だよ」

「高校生かあ。こんな可愛い女子高生が姪っ子なんて叔父さんとしては、さぞ心配つてわけ？」知成は直雄をニヤニヤしながら見た。

「いいから、もう帰れよ。だいたい何しに来た？」

「良い酒が手に入ったから、二人で飲もうかと思って。央那ちゃんも一緒にどう？」

「央那は未成年だ」

「固いなあ」

「固くて結構。央那を悪の道に引きずり込むような真似は絶対に許せない」

「悪？ ホント失礼だな、お前」

央那は一人の顔を見比べていた。放つておいたら永遠に一人の会話は終わらなそうだ。

「・・・あのお・・・」

央那のおずおずとした声に二人は同時に振り返った。

「お酒は無理ですけど、皆で仲良くお茶でも飲みませんか？」

その言葉に知成はふつと笑った「本当に可愛いな！」

央那の顔がみるみる赤くなつていく。

その反応に直雄はムツとして央那の腕をつかみ立たせた。

「央那、帰るぞ。知成も出ていけ」

「はいはい。帰るよ。央那ちゃん、またね」 知成はひらひらと手を振つて帰つて行つた。

「・・・嵐のような人。

「央那、荷物持つて」 直雄は央那の買った紙袋を持つて玄関に向つた。

「え？ 本当に帰るの？」 央那は慌ててカバンを持ち直雄の後を追つた。直雄はその言葉に耳を傾けず玄関の扉を開いた。

央那はムツとした。

「その反抗的な顔は何だ？」 直雄も険しい顔をしている。

「だつて」

「だつてじゃない行くぞ」

「わかったよ」 央那はムツツリとした顔で玄関の扉を押さえている直雄の前を通つた。

その後、央那の家に着くまでの車の中で一人は一言も口を聞かなかつた。

何で、私達こんなに怒ってるの？

央那は自分の態度も良くないけど、直雄の態度もいつもと違つて変だといぶかしんだ。

家の前に着き、エンジンを止めると直雄は一呼吸置いてから助手席に座つている央那を見た。その真剣な眼差しに央那の心臓の鼓動は早くなつた。「どうしたの？」恐る恐る央那が尋ねると直雄は手を伸ばし央那の頬に触れた。

「悪かつた。央那は何も悪くないよ」

央那は黙つてうなずいた。

「怒つてる？」直雄が優しく聞く。

「もう、いいよ」央那は自分の頬に触れている直雄の手に自分の手を重ねた。

直雄は微笑み、顔を近付けた。

央那がビックリして何も出来ずにいるうちに直雄の唇が央那の頬に触れた。

それは一瞬の出来事だつた。

「さあ、家に入つて」直雄は手を離した。

「あの・・・家に入つて行かないの？」

「今日はやめておくよ」

「うん、わかつた」

二人は車の中で別れた。

一階の自分の部屋の窓から直雄の車が遠ざかつて行くのを見ていた。

あのキスは何だつたの？

ただの謝罪？

それとも、もっと何か理由があつたの？

その日、央那は直雄の唇の感触を思い出し、なかなか眠れなかつた。

直雄とショッピングに行つてから一週間が経つていた。

央那はいつもと変わらない日々を過ごしていた。表面上では。心の中はあの日のキスのことでいっぱいだつたけど。何も初めてキスされたわけじゃない。子供の頃はよく頬やおでこにキスされた。でもそれはだいぶ昔のこと。少なくともここ五年くらいの間はなかつた。

それが何だというの？

別に唇にされた訳じゃないのに。

央那は一生懸命、そう自分に言い聞かせていた。

そんな時、急に夕食で母、美櫻が切り出した。今日は竜輝が仕事で遅くなつていて一人きりだつた。

「明日の土曜なんだけど何か用事ある？」

「え？ 別にないけど？」

「じゃあ、夜は三人で食事に行かない？ 国道沿いに新しいレストランが出来たでしょ？ あそこに行つてみようよ」

「・・・たまには一人で行けばいいのに」

央那は何気なく言つた。すると笑顔だつた美櫻の顔が途端に陥しくなる。

「三人で行こうって言つてるんだから、行くのよ！」

「そんなに怒んなくとも」央那は美櫻の剣幕に驚いた。

「ごめん。でも、あんた最近ちょっと変だから」美櫻は箸を置いて正面からじつと央那を見た。

「え？ 変つて、そんな・・・

「直雄くんと何かあつた？ 最近連絡とつてるの？」

美櫻の言葉に央那は動搖した。そんなに私つてわかりやすいんだろうか？

「何もないよ。メールもしてるし」メールをしているのは本当だ。

当たり障りの無い、ごく単純な日常のことばかりだが。

「そう？」美櫻は疑わしそうに央那を見てから、ため息をついた。
「央那が直雄くんを好きなのは分かつてること、あんまり思い詰めたりして欲しくはないの。あなたはまだ高校生だし、これからだって色々な出会いがあると思うから急いで結論を出そつとしないで」
「どういう意味？」

央那は返す言葉も無く美櫻を見た。

「ごめん、変なこと言つて。明日の夕食は三人で行こうね？」

「うん」央那は頷いた。

美櫻は満足そうに頷き食事に戻つた。

その夜、央那はまた眠れない夜を過ごした。

次の日の夜。央那は竜輝の運転する車の後部座席でぼんやりと外を見ていた。街は街頭に彩られてキラキラと輝いている。
食事は楽しかった。とっても。

これが理想の家族つていうのかもしれない。父親と母親に愛され、守られ、大切にされていると感じる。とても居心地の良い自分の居場所。

「とつても良いレストランだつたね。今度は直雄くんも一緒にまた行きましょうよ。ね、央那」美櫻が助手席から振り返る。

「うん」央那はにっこり笑い答えた。

「直雄は相変わらず忙しいのか？」信号待ちに交差点で竜輝がバツクミラー越しに央那を見た。その瞳は優しい。

「そうみたい。直雄が忙しいのはいつものことだしね」

竜輝は微笑み、また車を走らせた。

その時、クラクションの音が鳴り響き、ブレーキで車が大きく揺れた。

何もかもが一瞬の出来事だった。

ゅつくつと意識が戻り瞳を開けると、そこは暗闇の車の中だった。

サイレンが遠くで鳴っている。

何か焦げたような嫌な臭いに眉をひそめる。

「・・・私・・・?」

手をあげ額に触ると濡れていた。ぬるりとした嫌な感触。

「え?」

・・・血?

急に痛みを感じ、央那は呻いた。痛いのは額だけじゃない。どこもかしこも痛みを感じる。そして目が暗闇に慣れてくる。

車の前方は大きく潰れ、原型を留めていなかつた。

「お母・・さ・・ん? お父・・・・・」 央那の声はそこで途切れた。

潰れた車体から美幌の腕が見えた。だらんと下がり血まみれの。

「う・・・そ・・・・。嫌あ・・・・」 央那の瞳から涙が溢れた。その腕を掴もつと手を伸ばすが届かない。自分の体はまだ後部座席のシートベルトにしっかりと固定されていた。

痛みに意識がぼやけていく。

「早く、こつちだ!」

周りが騒がしく、車のドアが開けられるのがぼんやりと分かつた。しかし央那の意識は闇へと落ちていった。

無機質な病室で直雄はベッドの傍らに座り、包帯と管だらけの央那を見つめていた。それでもしていないと彼女がこの世から消えてしまうかのように。あまりにも痛々しい姿に目を背けたくなる。

どうしてこんな事に？

直雄の瞳に涙がにじんだ。それを振り払うよつこまばたきをする。まだ泣けない。央那が目覚めるまでは。

知らせは突然だった。警察からの連絡に頭がついていかなかつた。事故？重態？即死？

無我夢中で駆けつけた病院で見たのは一人の遺体とたくさんの中につながれた央那の姿だった。

どうしてこんな事に？

心の中でその言葉だけが繰り返し浮かんでは消えていく。直雄は握り締めた拳を額に押し当てる。

頭が割れるよつに痛い。私、どうしたの？目覚めたくないけど、遠くで声がする「央那」って誰かが呼んでいる。

直雄？直雄なの？

どうして私を呼ぶの？お願い、そつとしておいて……。

「央那……」

苦痛を帯びた直雄の声。

ああ、駄目だ。私はこの声を無視することなんて出来ない。

央那はそつと瞼をあけた。

視界はぼんやりと霞んでいる。

「央那？」

夢と同じ。

直雄の声が聞こえて、央那はゆっくりと声のする方を見た。すると手をギュッと握られた。痛いほどに。思わず顔を歪めると「ごめん」と直雄が謝り握られた手の圧力が緩んだけど、手は握られたままだった。

「すな・・・お・・・?」喉がカラカラで上手く声が出せない。

「央那、良かつた」

直雄は握り締めた央那の手を唇に持つていく。

「・・・どう・・・したの?」何だか直雄の様子が変だ。いや、変なのは彼だけじゃなく私の体もだ。頭も腕も足も・・・色々な所が痛い気がする。

「何でもないよ。今はまだ・・・ゆっくりと休んで」直雄の潤んだ瞳が揺れた。

休む・・・?

そうだね、まだ眠い。頭が考えることを拒否しているかのようだ。そうして央那はまた闇の中へと落ちていった。

三日後。

央那の意識はまだぼんやりとしていた。時々目覚めて直雄や医師と少し話したりしたが痛みと麻酔に意識が阻まれていた。

「央那?」直雄がそつと額に手をおき呼びかけると央那はそつと目を開けた。

「・・・私?」央那はゆっくりと視線を直雄に向かた。

「覚えてない?」

「何を?」意識がぼんやりしていて何だか変な感覚。

「央那は兄さんと義姉さんと一緒に車に乗っていてトラックとぶつかったんだ」直雄は手を額から頬へと移す。表情は穏やかだけど目

の奥はは辛そうに見える。

「トラックと？」

「トラックとぶつかつた？」

そう・・・私は車に乗つていて・・・・・。

頭の中で車のブレー キ音が鳴り響いた。

「あつ・・・」

「央那。大丈夫だ。央那には俺がいるから」直雄は両手で央那の頬を包んだ。

「お母さんとお父さんは？」央那の瞳から涙が溢れた。次から次へと記憶がよみがえり頭の中がパンクしそうだ。

「一人は即死だつた。央那は後部座席にいたから助かつたんだ」

「うそ・・・」

どうして？

央那は腕をあげ自分の頬を包んでいる直雄の手の上に自分の手を重ね、ぎゅっと握つた。腕は痛んだがそんなのどうでもよかつた。今は、何か確かな物に触れていたかつた。

「直雄・・・」

「大丈夫。大丈夫だから」直雄の瞳が揺れた「央那は絶対に俺が護るから」

直雄・・・・・。

私には直雄しかいない。直雄にも私しかいなくなつてしまつた。私達は一人きりになつてしまつたんだ。

事故から一ヶ月が経つていた。季節は秋に移り変わらうとしている。

央那はあの事故から初めて家に帰つて來た。玄関でためらつて車を車庫に置いて戻ってきた直雄が頭に手を乗せた。

「入んないのか？」

「あつ・・・」言葉を失い俯く。

「怖い？大丈夫だよ、俺も一緒になんだから」直雄は央那の手を取り、玄関へと歩いて行つた。

直雄は実家に戻り、央那と一緒にこの家で暮らす事になつていて。もう一週間前から引越してきている。玄関を開き、家へと入つた。一見何も変わつていない。でも何かが違う。空氣だろうか？

「ほら、上がつて」直雄は央那の背中を押した。

「あつ、うん・・・ただいま」

「おかえり」直雄は笑顔で答えた。

家中を進んで行き、リビングに入りゆつくりと中を見回して目に入った物にハツとした。

二人の遺影が飾つてある。

体が凍りつき、頭の中が真つ白になる。すると後ろから肩をぎゅっと掴まれた。

「大丈夫？」直雄がそつと聞いた。

「あ・・・」言葉が続かない。

肩から伝わる温もりに目頭が熱くなる。

央那はこの時、初めて両親が亡くなつた事を現実の事として実感した。

「央那？」

ドアのノックの音と共に直雄が問い合わせた。

ぼんやりとベッドに横になつていた央那は勢いよく上半身を起こした。

「何？」

「俺、ちょっと会社に行かなくちゃいけないけど、一人で平氣か？」

「平氣だよ」

本当は少し不安。

今まで家に一人きりになることは、殆どなかつたし。

「じゃあ、行つて来る」

あ・・・

央那は急いでドアに駆け寄り、勢いよく開け直雄の後姿に声をかける。

「いつてらつしゃい」

直雄は振返り笑顔で「いつてきます」と答えた。

央那も笑顔を返した。

一人でご飯を食べて、お風呂に入つて、リビングでテレビを見た。テレビを点けているのに家の中が静かに感じる。

時計が午後11時を指したが、直雄はまだ帰らない。

寝なくちゃ・・・。

電気を消し部屋に戻りベッドに入るが目が冴えて眠れない。暗闇を見つめていると突然、事故のフラッシュバックがおこつた。

暗い車内。

焦げた臭い。

血まみれの母の手。

「いやあっ」

央那は部屋の電気を点け、その場にうずくまつた。

怖い。

暗闇も一人なのも怖い。

「直雄・・・」

お願い、早く帰つてきて。

その時、玄関のドアが開く音がした。央那は流れる涙もそのままに玄関に走つた。

「直雄っ！」

央那は直雄に駆け寄り抱きついた。

「央那・・・どうした？」直雄は驚いたが、すぐに彼女を抱きしめた。央那は腕に力を入れて更に強く抱きついた。直雄は黙つて頭をなでた。

二人は抱き合つたまま、玄関に立ち尽くしていた。お互の温もりに癒されていく。

「ごめんね」央那は少し顔を上げて直雄を見た。一瞬、辛そうな表情が過ぎつたが優しく笑う。その笑顔に安心すると央那はそつと彼から離れた。

「暗くて、一人で・・・」

「いいよ」直雄は央那の言葉を遮つた「俺に理由なんて説明しなくていいんだよ。央那が寝るまで側にいるから、安心して」

そして、央那の手を引いて部屋に行つた。央那は彼に促され、ベッドに入る。その間、二人の手は繋がれたまま離れなかつた。ベッドの横に膝をついた直雄は央那の頬に残る涙をそつと親指で拭つた。その間、ずっと微笑みを浮かべて。

央那はその微笑を見て、自分が辛いわけじゃないのに、と思つた。

直雄は央那が入院している間に、両親の葬儀を行い、央那の病院にも通い、自分のマンションからここに越して來た。央那にとつても、直雄にとつても唯一の肉親を亡くしたのに彼は央那の前では落ち着いて、彼女に優しく接していた。央那は自分が直雄にしてもらうばかりだと気付いた。すると急に罪悪感が込み上げる。

そんな央那の感情の揺れを感じた直雄は「どうした？」と優しく問いかける。

「私・・・直雄に甘えてばかりで・・・」言葉が詰まる。

「ん？」直雄は央那の髪をすき、促す。

「でも・・・ずっと、側にいて欲しくて・・・だから・・・」

「大丈夫、ずっと一緒にいるよ」

「・・・いいの？」

「当たり前だろ？俺はずっと央那を一番大切に想つてきただ。今さら、離れるわけない。だから央那もずっと俺の側にいてくれるつて、約束してくれるか？」

直雄の表情は真剣だった。

「うん。離れない」瞳から涙がこぼれた。

「泣くなよ、バーク」直雄は笑いながら、央那の頬を人差し指で軽く押した。

「だつて・・・益々、涙が出て来る。

「いいから、早く寝ろよ」

「・・・」涙目でじつと直雄の顔を見る。

ダメかな？・・・でも・・・・。

央那は思いきつて切り出した。

「一緒に寝ちゃダメ？」

「えっ」直雄は驚きに目を見開く。

「・・・やつぱりダメだよね。

「・・・いや、それは・・・」断られると思ったが直雄は少し、目を泳がせた後に央那の瞳を見返した「わかつた、いいよ」

直雄はスーツのジャケットを脱ぎ、ベッドに入った。

央那はドキドキしたが緊張とかそんなのは無く、ただ安心感を感じた。

間近な直雄の瞳を見つめて微笑むと彼も微笑み返し、央那を抱き寄せた。

今は一人とも一緒にいて互いの温もりを感じる事だけが、必要だつた。

(後書き)

最後まで読んで下さり、ありがとうございます。
このお話には続編があります。

一人の恋愛が本格的に動き出していくます。
随時、更新していきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5626k/>

君がくれた花～薔～

2010年10月8日15時12分発行